
誕生日小話

ななほし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誕生日小話

【Nコード】

N3959Q

【作者名】

ななほし

【あらすじ】

大好きな友人の誕生日に贈った（押し付けた…）天国組小話。

BLML的な触れ合いはありませんが、ベース（心の中で）は閻鬼です。

……

きつと閻鬼です…！（必死）

この場を借りて。

お誕生日、おめでとう。

つたない贈り物でごめんなたい（笑）

※サブタイトルの元ネタはこちら（<http://to-a.ru/>）のジェネレータさんから。

な…何か問題があるようでしたら変更します。

とある秘書の安楽浄土（前書き）

※要らぬ捏造設定がもろっと入ってます。（他日和キャラがほんのり出てたり）要注意。

とある秘書の安楽浄土

一瞬どころか数拍。

目の前で起きている状態が把握出来ずに固まってしまった。

――…可笑しい。此処は僕の部屋じゃないのか？

開けたばかりの扉から手を離さずに、ぎりぎりと言でも出そうなきこちなさで目線を扉脇へと遣ってみる。名前ではなく、部屋に宛がわれた番号が小さい木片で表示されているのを確認。

……矢張り間違はなく、此処は僕が使う部屋だ、と理解は出来た。
…できた、が。

――…ならば何故。

何故此処でこの人達はこんな状態なのだろう、と…広くなどない己の部屋で狭そうに、ぎゅうぎゅうに押し込められるように座る、同僚の獄卒やら、管轄の違う上司やら…果ては、遊び歩いては色々問題な気がする靈魂の姿までちらほらと見えながら、再度湧いた疑問を反芻してしまう。…とりあえず、の動きでぐるりと目線を部屋の端から走らせ…紛れるようにちんまり猫を抱いて座る少女やら、赤と青のジャージが鮮やかな奇妙なコンビやら、元は素晴らしい功績を残したらしい老人と、その靈魂に寄り添うように目付きの矢鱈悪い青年の姿まで…いや、君、そんなに面倒そうなら何でいるの……割と親しい面子へ心中でツツコミを入れながら見渡していくうち、徐々にじわじわと襲う脱力感が、胡乱げに細められていく目付きに出てしまうが、とりあえず気にしない事にして。

部屋の中央で一人分のスペースを置いた、その傍らで物凄く楽しそうな笑みを見せている、自分の上司へ目線を置いた途端、固まりつ

放しだった自分の口が漸く動いてくれた。
なに、ときこちないまま零れた声を切欠に、

「ッ何してんだこのびっくり大王イカアアアアアアアアア！」
「ふふーん。びっくりしてくれたなら大☆成☆こぶあああああッ！」

漸く動いてくれた感情の反動の所為か、声だけではなく、思いつきの跳躍で得意げに鼻を鳴らす上司の上へ飛び、同時にぎゅん、と伸びた右手の爪がその額を勢い良く貫く。

語尾を悲鳴に変えた彼の額から噴き出る鮮血を受けぬように顔を逸らしながら、何時もの事として爪を引き抜けば、ごろごろと床を転がる閻魔大王の姿が見え…その動きに目を輝かせた青ジャージが嬉々として一緒に床を転がり始めるのを見遣り、一つ溜息を吐けば。寒くはないのか、肩をむき出しにした赤いジャージを纏う青年が床上で膝を擦らせながら傍に寄ってきた。

一番話し易い相手として認識するこの靈魂へと疲れた目線を遣れば、察してくれたらしく、困ったように苦笑した彼が、片手を翳しながらそっと耳打ちをする。

「ごめんね。誕生日のお祝いをしたいんだって。それでみんな呼ばれたみたいだよ。」

「は…？お祝いつて…いや、でも僕に『誕生日』なんてそんなもの…」

…と、予想外な事態に驚きつつそこまで口にしかけて、はっと目を瞠る。

目の前で事情を話してくれた赤ジャージの青年が、「あれ？違った？」と…きょんとしてる姿は既に思考に入らず、未だに青ジャージのおっさんと一緒にごろごろ転がり痛みに耐える上司と交わした

記憶のある会話へ意識を落としながら、じわじわと妙な汗を感じてしまう。

…たしか。

亡者の列が途切れ、珍しく時間の空いた際に、酷く暇そうにかけられた声が切欠だったのだと思う。

唐突に、嗚呼、という酷く間延びした声が耳に入り、ちらりと振り返れば、

「そう言えば…ねえ。鬼男君が秘書になってそろそろ一年だよねえ」

手前に置かれた御璽を指先でぐりぐりと押し弄りながらぼつりと零す、そんな急な話題の振り方にもだいぶ慣れてしまいがら、はあ、と曖昧な相槌を打ちつつ、亡者のリストを連ねた巻物へと一度視線を戻して

「…そうですか？まあ、一年、と言っても…冥界での時間ですから正確かどうかは定かじゃないですが。」

それ以前に、朝なのか昼なのか夜なのかすら把握し難いこの場所でも過ごしてきた時間を、一年と称していいのかどうかすら解らない。くるくると巻物を巻いて戻していきながら、一年、が長いのか短いのか…閻魔大王の傍に立ってからの時間を振り返ってみる。

——…碌な事がなかったな…

：うっかり振り返ってしまった自らの過去に、がくりと肩が落ち項垂れ、思わず深く重い溜息が口から洩れてしまった。

そんな此方の様子など気にせずに、そうだとも、と会話を接ぐ応えが耳に入り、一気に疲労感を増した顔をのろりと上げれば。両肘を机上へ着いて、緩く指先を組ませた手の甲へ顎先を乗せた大王が笑みを向けていた。

：途端、どきりと異様な鼓動の跳ね方を自覚はするが：そんな此方の变化すら、把握しているのかしていないのか、変わらぬ様子で口を開き直す様子が視界に入る。

「此処での一年、なんだから一年で良いの。：嗚呼：そうか、一年か。そうかそうか」

「……なんですか：」

そうか、と何度も繰り返すたびにその顔が：威厳のある裁く者から愉しすぎる悪戯を思いついたクソガキの顔へと変わっていく事に氣付いてしまえば、ぞわぞわと悪寒にも似た厭な予感が背を走り、僅かに引き攣る口元を隠す気もなく、唸る調子で問う声を投げてしま

い。
：すれば、鼻を鳴らす遣り方で軽く笑った大王は、その血色の悪い相貌をにんまりと笑ませて

「だって鬼男君、誕生日解らないって言うんだもの。流石にオレだって君らが生まれた時を全て覚えているわけじゃないしー」

「……」

嘘だ、と瞬間的に思う。この御方ならば、冥府に存在する無数の鬼が何時生まれ何時消えていくのか、全て把握しているように思えて仕方無い。：そうは思うが、それを口に出したところで、のらりくらりと追求をかわしていく大王の対応は予想出来てしまい、代わり

に。低く溜息を零しながらゆるく首を左右に振り

「答えになってません。一年だとしたら何なんだつつてんですよこの大王イカ。ついに言葉まで通じなくなったかこのイカ野郎。」
「ちょ、ちょ…酷っ！途中から思いっきり辛辣さが倍増じゃない！？」

ぎょっとした表情で、何か寒さから耐えるような…自らの肩を自分で抱くようにする仕草で此方を見、非難を飛ばしてくる様子が見えるが。其れすら…「閻魔大王」に必要な仮面なのだと解ってしまえば、最初に目にした時よりは「幾分」苛立ちも抑えられ、にっこりと笑みを見せてさしあげることが出来た。
巻物を持たない側の手先に、此処一年で切れ味の増した爪を伸ばし光らせる事は忘れずに。

「…一年だとしたら、何だと仰るんでしょうか？誕生日がどうしたと？いい加減答えてくださらないと、脳天ぶっ刺して遊び始めますよ？僕が。飽きるまで。」

「辛辣のレベル超してるよ！？何それ！そんな子に育てた覚えはないよ！？」

「育てられた記憶もありません勘弁してください」

「酷ッ！お…鬼だよ…鬼が居るよ…！」

「鬼ですが。」

…そんな、何時も通ると言えば何時も通りな遣り取りを交わしたのがつい先日。

結局苛立つ感情を堪えきれずに上司の額やら側面やらに爪で穴を開けてしまった後、確かこう言ったのだ。

「生まれた日だけが誕生日じゃないからね、どうせだから：此処で秘書やりはじめた日が誕生日でいいじゃない。そうしよう。そうしなさい。」

等と：正直どうでも良い僕の気持ちなど無視し、物凄く良い事を思いついた笑顔でうきうきと命令口調な言葉まで添えて。

――：で、コレか：っ

此処まで回想するのに然程時間をかけなかった所為で、傍に未だ居る赤ジャージの青年が、がっくりと膝と手を床について頂垂れた僕に、どうしたのかとおろおろし出す様子は伝わるのだが：その間にも其々アクが強い人物が揃う所為か、わいわいがやがやと各々勝手に酒を酌み交わし、どこから調達したのか料理に手を付け始める気配も同時に伝わる。

：何も狭い部屋でやらなくとも良いだろうこの人数での騒ぎに、原因が解ってしまえば邪険にする事も叶わず、最早事を収める手が思いつかない絶望で頭が上げられない。

もしかしなくても今日はゆっくり睡眠をとれないのではないか：？
：中々気持ちを浮上させられないで居る僕を放置は出来ないらしい、赤ジャージの青年が困り出す気配を感じた所、で：ぽんぽん、と肩を叩かれ、思わずのらりと顔を上げれば。

先程僕が爪を貫通させた額がすっかり塞がった顔に笑みを乗せた大王が、目線の高さを合わせるようにしゃがみこんで其処に在った。その様子に気付いた赤ジャージの青年は、ほ：と微かに安堵した息を逃すと同時、ゆっくり立ち上がって、青ジャージのおっさんの方へだろー離れていく気配が伝わり。

自分の狭い部屋の中、周りで煩いほど騒ぐ知り合いに囲まれていると言うのに、視線を近い距離で合わせた閻魔大王との空間だけ、さつくりと切り離されている錯覚を覚えてしまう。

…ふと。暫し沈黙を保っていた相手の唇が動き、ぴくりと目を瞠ってしまえば。言葉より先に、くつりと笑む呼気を逃し、「…言う相手なんて居なかったから。伝えられる事が嬉しいよ」などと…本当かどうかすら定かではない前置きが届き。

嗚呼、その言葉が…その声で紡がれる貴方の言葉が、僕にどれ程影響を与えるのかを知った上でよほと言いたかったのか、まるで自分の事のように、酷く嬉しそうな満面の笑みで貴方は口を開く。

「 、 」

予想通りの言葉だと言うのに、それでもぶわり、と一気に顔辺りへ熱が集まる感覚を味わう。

彼が今口にした言葉は、正確に言えば違うのだろうけれど…それを指摘として飛ばすには、今感じる感情は歓喜に偏り過ぎて叶わない。祝う言葉と同時ににこにここと、楽しそうに愛しそうに笑む彼から、辛うじて目線だけを外す事には成功しながら、

「…ありがとうございます」

そう、自棄に気恥ずかしい心情のまま祝ってくれた礼を口にすれば、視界に入れずとも、余計に相手の笑みが深まるのを感じてしまい。更に理由の掴みきれない恥ずかしさに襲われてしまう羽目になってしまった。

口惜しい。口惜しいので、次は彼に同じ状況を味合わせてやろうと決意する事で気を紛らわす。以前見てしまった、一人で祝う写真と同じ様になどしてやるものか。

> i 1 7 2 4 8 — 2 3 4 5 <

とある秘書の安楽浄土（後書き）

2010. 1. 14 作成

とある君主の日常記録（前書き）

※前話同様…というか其れ以上にだいぶ捏造が入ってきております。
ダメな方は本当に回れ右でお願いします。

十王とか何とかもう色々神様すみません…orz

閻魔大王の誕生日…って…着任日なんでしょうか…w

とある君主の日常記録

若干の起伏はあれど、ただただ流れていく時間は苦痛すら忘れるほどの「単調さ」で。

その流れに変化をつけるべく、気紛れに：正に「悪ふざけ」でしかない奇行として残しただけの、過去の一時。

それが原因でまさか、こんなにも感情らしい感情を抱かせてくれるとは、予想すら出来なかった。

中々動いてくれずにいた唇を意識して動かし、次いで未だ呆然とする目線をぎりぎり相手へ向けて、漸く辛うじて、何故、と。掠れながらではあれど何とか問いを零せた。

すれば、意図的になのか何時も通りの、幾分冷たそうにも見える相貌のままの彼は、はあ、と：やはり何時も通り過ぎる投げやりな相槌を挟んで

「いえ、僕だけとか、なんか口惜しかったんで」

「く……くくくやし……！？えええええちよつとどころじゃなく傷付くなにそれ鬼男君……」

語尾に至るに従ってがくりと項垂れ、項垂れるだけでは済まず、両膝と両手をその場について愚痴混じりになった呼気を垂れ流す羽目になってしまった。：何とか感情を立て直そうとした、幾分苦しい誤魔化し方でもあったが。

何時も通りの仕事が終わリ、何時も通りに秘書を揶揄するスキンシップも終え、結果額から流れた血を袖口で拭いながら、「それじゃあね」と片手を上げて仕事部屋となるその場から私室へと戻ろうとした所で。幾分慌てた様子でその秘書から呼び止められた。

——…珍しい。

この鬼と過ごす時間も短いとは言えなくなってきたものの、こうして呼び止められる事は今まで一切無かった。

公言はしないものの、彼はどうやら己で何かしらのルールを設けているらしく。仕事を終え、微々たるものであれど己の自由が効く時間へと移る私を、それが僅かであれ留めぬようにしているように思える。

それに気付いた時の、あの何とも表現し難い面映さは今でも確りと記憶に残り、ほんのりと胸の内を暖めてくれる光源にもなっているのだが…

そんな怪訝さが咄嗟には抑えきれず、既に背を向けていた姿勢から振り返り、僅かに首を傾げたまま相手を見遣る。すると…一気に血の気の引いた表情で口を噤む様子が見えた。

…嗚呼…本当に聡い子だ、と思う。

普段、遠慮なく接する割に、こういう気遣いは恐ろしい程働くらしい。それが好ましくもあるのだが、如何せん、彼に限ってはそれが強すぎる。

思わず口端を僅かに上げて笑んでしまいがら、なあに、と。

催促するでもなく、責めるでもなく。

彼が普段見慣れた「自分」の姿を意識しながらそう問うてみれば、徐々に目線を落として身を硬くし始めていた彼が、小さく息を洩らす。――直後、どうやらそんな自分を恥じているようだが。

心中の葛藤が面白いほど見て取れる様子は、正直中々居ない逸材なだけに好ましく映る事に、恐らく本人は気付いてすらいないだろう。ふ、と口許から逃げた呼気に笑みが混じった。

そんな間を置いて、す、と。微かに息を吸い直した私の秘書は、落しにかけていた目線を再度こちらへ真っ直ぐ上げて、口を開き直した。

……何処か、物凄い決意を込めた表情で。

「…申し訳ありません。ひとつ、我俣を聞いてください。」

「――…え？」

もう今度こそ、取り繕う間など一切持てなかった。長い長い間を置いて漸く出た声は、晒してしまっているであろうポカンとした表情と同等に間の抜けたものでしかなかった。

自己の欲を滅多に出さないこの子が我俣を口にする事すら珍しい上に、「聞いてくれないか」と問うものではなく、「聞け」と。

先の呼び止めた行動も相俟ってか、立て続けに起きた平素と違う「日常」に中々対応が追いつかない。

此方の声が届いたらしい彼の相貌に、先とは真逆に血の気が集まり、浅黒い肌が赤くなっていく様子が確り見える頃になって漸く、は、と。詰めてしまっていた呼気を小さく逃し、

「――…鬼男君、顔まっギアアアアアア」

「煩い。聞いてくださいって言ってるじゃないですか聞いてください聞いてくれないってのかこの野郎」

「ちょっ……待……そんな顔まっかにしながら爪刺されても威力半ば……イヤアアアアアアアア」

「それ以上言いやがったら穴を増やす！」

「ふやっ……増やしてる！すでに増やしてるよ！！」

言葉の選択を間違っただけらしい。

顔色はそのままに（むしろ赤みが増したようにも思えるが）、声を遮るが如く慣れた様子で爪を伸ばし、こちらの額をぶつぶつと貫きながら半ば自棄のように催促をかけてくる様子で、漸くこちらも調子もどってきた。

——…幾ら死なない身体だと言えど、痛いものは痛いというのに……

思わず愚痴じみた呟きが心中で零れるが、言葉に出してしまえば無駄に煽るだけでちっとも本題に移ることが出来ないことは解る為、半ば趣味な、秘書いじりの欲を抑え込む。

ギブギブギブ、と両手を挙げてはたばたさせて見せれば、ふう、と小さく嘆息する間を挟みながら、ずるりと爪を引き抜かれた。

引き抜かれる反動でわずかに揺れた頭を押さえながら、爪にこびりついた血液を、ぶん、と一振りして払いつつ元の長さへ戻していく秘書の様子を盗み見てみる。

未だに赤みを帯びた顔色は完全に元には戻っていないものの、若干落ち着いたらしい。おざなりに指先を下衣の腰辺りで拭いながら、こちらへ目線を……睨む強さの双眸を向けて、ぼそりと

「……カメラを、貸して戴きたいだけなんですよ」

1mも離れていないこの距離だから聞こえるような声量でぼそぼそと、漸く吐いてくれた相手の「我俣」は、一瞬聞き間違いかと思え

る程、願いとしては軽く。

その軽さに、額を押さえた手をどける思考すら働かず、

「……………は…?」

などと。

また傷を増やしそうな間の抜けた声が洩れてしまった。

途端、どこかムキになったように拳にした手を力いっぱい握りしめて彼が声を張り上げる。

「だか…だから！お前持ってるだろ！？前見せてもらったろくでもない誕生会の写真があったじゃねーか！」

「ろ……………ろくでもない…」

一応奇行だったという意識はあるが、面と向かって言われると流石に効く。

愕然と呟いていれば、ああもう、と右手で髪を掻いた秘書が焦れた様子で一步こちらへ踏み出してきた。

その勢いのままがっしりと片腕を掴まれてしまえば、反射でのろりと其方を見上げてしまい：何処か怒ったような表情を見せる、紅色の目とかちあう。

……余程情け無い面を見せていたらしい、嫌そうに顔を顰めた彼は、掴んだ腕を引きながら「行きますよ」と歩を進め始めた。

ずるずると引っ張られながら扉へ向かう事になりながら、「ろくでもないって…」等とぶつぶつぼやけば、ぎり、と最早殺意まで見えそうな睨み方をされてしまった。……可笑しい、主人は此方な筈なのに…

「あれをろくでもないと言わずに何と言えと。」

「酷ー!!」

「酷くねえ。：もうそれはどうでもいいので、カメラ貸してください」

「どう……どうでもいいって君……」

平素通りの、まるで主従が逆転したかのようなふざけた遣り取りに洩れた抗議は、彼が押し開けた扉から引きずり出され、背後で閉まる音に掻き消される事になった。

人影が無い静まり返った通路を歩きつつ、額から外した己の、血で真っ赤になった掌を見て悲鳴を上げてしまい、うるさい、と後頭部を引っ叩かれる騒ぎを起こしながらも、最奥にある私室へ辿りつけば、掴みっぱなしだった私の腕から手を離れた秘書が、ちらりと此方を見遣る視線に気付く。

気付いて視線を何とはなしに返せば、何処から取り出した手拭らしき布で、額にこびりついた血痕をごしごしと拭ってくれながら口を開いた。

「――：すぐに返します。邪魔をしている自覚はありますが、命じてくださいれば退散しますから」

「：君を邪魔だと思った事なんてないよ。」

拭ってくれる好意をそのまま受ける間を置いて、こればかりは伝えなくてはならないだろう応えを返せば、手拭を引き戻して几帳面にたたむ手の動きを止めた彼が、一瞬驚いたように瞠った目をくしゃりと歪めるように細め、そうですか、と小さく、呼気に混せて零す。

笑っているのか、何かを堪えているのか一見判断し難いその表情に、

うん、と笑みを向けて頷いて見せてから、大き過ぎる扉へ手を伸ばし、軋む音すら立てない其れを押し開く。

――途端。

ぱん、ぱん、と。

左右から幾分遅れて響く破裂音。

部屋の主が帰還していない所為で暗い筈の室内から洩れる光。

同時に、「おめでとうございます、大王」と。其々違う声音が重なって聞こえ――

流石に、不意打ちが過ぎた。

押し開いた扉に添える手を伸ばしたその姿勢のままで固まり、思いきり見開いた目を数度開閉しながら、ぐるり、ぐるりと室内を見渡す。

思考など回っていないに等しい。

左右には、細い紙テープを垂れ流す三角錐状の小さい包みを持った牛頭馬頭が、相変わらず喜怒哀楽が掴めない表情を晒して立ち。

手作りだと解る、紙テープやら花やらで所々華やかに飾られた室内。誰かが持ち込んだのか、普段見ない大きな目の机に白いテーブルクロスが掛けられ、なにやら沢山の料理と、大き過ぎる気がするホールケーキが鎮座し。

その周りをぐるりと囲むように、何かない限り普段あまり顔を見せない十王らがずらりと揃って此方を見遣っていた。

――一体何事だ。

誰とはなしに問おうとした寸前、室内の天井辺りに大きく掛けられた紙が漸く視界に入った。

「……えんまだいおう、おたんじょうびおめでとう…」

未だに回らない思考のまま、視界に入った其れをぼつぼつと読み上げる。

：見覚えのあるその横長の垂れ幕を読み上げた途端、一気に理解出来た。何故こんなに存在感のある物が一番最初に視界に入らなかったのか、自分でも解らない。しかもあれは自分の手製じゃないか。

私を出迎えてくれた、室内に勢ぞろいの部下らは、そんな此方の様子を見て其々談笑へ移り、一気に賑やかな空気へ変わる。

扉脇に控えていた牛頭馬頭も揃ってテーブルへ向かうらしい様子を見せた。

その背中を眺めてしまっていたいれば、そつと。未だに体勢を崩せない此方の背を押す感覚が届く。

入室を促すような力加減に抵抗する気もなく、のろのろと姿勢を戻して室内へ入りつつ、やはり緩慢な仕草で背後を振り返れば、私に続いて部屋へ入った秘書がゆっくりと扉を閉めた所だった。

その相貌が此方へ向き直されるのを眺めながら漸く零せた問いに、「口惜しかったので」などと。

シンプルなだけに何の事か思い出すまで時間がかかってしまったその回答に崩れ落ちてしまえば、何人かの部下らから向けられる視線は感じるが：いつものこと、とばかりにすぐに消える視線の感覚に若干ながら寂しさを感じてしまう。：口に出せば「自業自得だ」と辛口な秘書に一刀両断されそうなので言わないが。

はあ、と。多すぎる感情を込めて、笑みの混じる嘆息を洩らしながら、のたくたと立ち上がれば、崩れ落ちた此方に対して一切リアクションを返していなかった秘書が、「大王」と声をかけてきた。もう一つ嘆息しながらゆるりと其方を見遣り、流石に笑う顔は抑え

きれないまま、室内に施された明らかに手作りの装飾を指差し

「……君なの？これやったの」

「…主に泰山王様が協力してくださいました。楽しそうでしたよ？」

「……………嗚呼…だろうねえ。細々した作業ダイスキだからねえ…」

「料理は都市王様が主に」

「解る。解る。それは解る」

「そうですか。…あ、最初に言い出したのは僕です」

「やっぱり君なの！？随分さうとカミングアウトしたよこの子！」

指差していた手を下ろしながら、ぽつぽつと確認のような会話を交わした最後に紛れるような白状は一瞬聞き流してしまいそうで、仕掛け役な彼を見遣れば。再度、先ほどと同様にけろりとした面構えのまま、はあ、と相槌を打ち…今度は酷く真面目な表情で

「仕方ありません。諦めてください。これは決めていた事でしたので。」

「……………は…？」

きっぱりと告げられた其れは、恐らく説明を求めても応えてはくれないそうだったが、疑問の声は許容してくれるらしい。

洩れた声に対して、秘書はうんうん頷きながら

「僕もここまで規模が大きくなるとは思っていなかったんですよ。誕生日の写真を撮ったのはいつだったのか、から聞き込みを…いやあ…これは驚きますよね」

「驚くどころじゃないよ！？十王揃い踏みって何この状況！」

「デスヨネー」

ですよね、って君……

己が感じた感情に対して返されるには軽すぎる相槌に、思わず返す言葉が詰まってしまえば、その隙をつくように掌を此方へ突き出された。

突き出されたその掌を思わずしげしげと眺める間を置き、それでも彼の意図がつかめず、そろりと片手を上げて、その掌へぽすんと置いてしまえば。

真顔だった彼の表情がぎしりと強張り…次の瞬間、ぺしりと勢い良くその手を振り払われてしまった。

「そ、う、じゃ、ねー、だろ！！早く貸せつつってんだろこのアホ大王が！！」

「酷ッ！なん…何なの！祝ってくれる場じゃないの！？」

半ば悲痛な声を張り上げれば、主役そっちのけで談笑する部下の何人かが煩そうに此方に視線を寄越す気配が伝わるが、気にしない事にする。

怒りなのか何なのか、顔を再度赤らめた秘書はその視線すら意識に入らない様子のまま、ずい、と再度掌を此方へ向けて

「カメラ。カメラです！早く出してください。十王様方ならともあれ、僕があんたの部屋漁るわけにいかないでしょうが！」

「あ…あああ……そういえばそんな事言ってたねえ」

ただの口実なのかと思って居ただけに、すっかり意識の外に放ってしまったていた彼の「我俣」を漸く思い出し、「そういえば、だど…！？」等とさらに怒りのテンションを上げる秘書を尻目に、のたくとテーブルを横切り、筆笥代わりのような箱の一つへ近付いてこそこそと漁る。

その後ろを着いてきた気配を感じ取りながら、そういえば、と。漁

る手を止めずにふと感じた疑問を然程考えずに放ってみる。

「これって、ずっと計画してなきゃ出来ない事だよねえ…全然気付かなかったよ」

「……………気付かれたら、意味が無いので」

——意味が無い？

カメラを探り当てた手を思わず止めて、その回答を頭の中で反芻してみるが…真意は考えても出てきそうにない。

ふうん、と相槌を打つだけに留めて、掌に乗るサイズのそれを掴み取り、振り返って彼へと差し出せば、何処かほっとした表情で其れを受け取った表情が見て取れた。

その表情の変化に釣られ、ゆるりと頬が緩むのを感じながら、ねえ、と声を掛ける。手元に渡ったカメラを弄り始めた秘書がその声に視線を上げてくれるのを待って

「意味が無いって、どうして？」

決して責めるつもりが無い事は、出た声音で解ったとは思うのだが…その問いに、ぐっとカメラを握る手の力を込めた彼は、暫し此方から視線を動かせずに居たものの…

何を考えて居るのか、じわじわと顔色が朱へ変わっていく変化に合わせるように、ゆっくりゆっくり視線を斜め下辺りへ落として行きながら引き結んだ唇を一度僅かに開き…躊躇うような僅かな間を置いて再度閉じる。その後また、じわりと唇を動かした後、ぽつりと、

「決めていた、事でしたので」

其れ以上説明はしないつもりなのだろうと解る短い、先程と同様の

回答が返されてしまった上、こんな様子まで見せられてしまえば、其れ以上の追求など出来るわけが無く。そう、と最早完璧に押さえきれない笑い混じりで応えを返す。

そんな此方の反応が気に入らなかったのか、幾分責めるような目線を向けられてしまうが、その顔色では迫力も何も無いに等しい。

他は器用にこなす癖に、妙なところで不器用なこの鬼が愛しくて堪らなくなり、そろりと手を伸ばして、見た目より柔らかい感触を返す金髪を撫ぜる。

すれば、落ち着くどころか耳まで色の変化を見せ始めた秘書が、勢い良く頭を振りながら手を振り払い、がつがつと足音を立ててテーブル前へ移動し始めていった。

「ほら！もういいですから大王もそちらに並んでください！撮りますよ！」

未だ赤い顔で、ぎっ、と此方をにらみながら指示する秘書の勢いに、ぷ、ととうとう笑い声が吹き出してしまうが、その代償として、彼の武器である爪が伸びてこないうちに、と。おざなりな応えを返して笑いながら、十王が並ぶテーブルの中央へと歩を進めた。

これぞ自分の仕事！とばかりにカメラを構えた愛すべき我が秘書が写真に写る気がない事に気付き、入る入らないで更に一悶着があったりはしたのだが。

「、閻魔大王。」

「——…うん、ありがとう。」

未だ存在していたのかと内心驚く「心」からするりと出た礼の言葉と、赤面しながらも意地で言ったと解るその言葉を貰えた時の記憶と共に、一枚だけだった写真という記録は、以前から所持していた其れとは全く違う記憶として、二枚に増え、カメラと共に収納箱の奥底に存在する事になった。

> i 1 7 2 4 9 — 2 3 4 5 <

とある君主の日常記録（後書き）

ひたすら長くなったので、一悶着具合を次話に。

省かれた一幕（前書き）

※捏造過多。加えて全話同様オリジナル的な十王出現。要注意。

省かれた一幕

――…ふと。

部下らに促された席へ腰を落ち着けると同時、カメラを手にした秘書の顔が正面に来て湧いた疑問。

数度瞬く間を置いて片手を挙げ、ぱたんぱたと力なく振って見せつつ

「…何してるの鬼男君。君まさか入らない気じゃないよね」

三脚らしきものも、それに代わるものも設置されていないまま、正面に立ちカメラを構え出す秘書の姿に真顔で問えば、物凄く意外な事を問われたとばかりにきょとんとした顔を返した彼は、はあ、と。何度目になるか解らない力ない応えを返し

「そうじゃないと、誰が撮るんですか。僕がただ座って十王様方にシャッター押させるなんて無理ですよ」

「ばっ…：バカなの！？ 台か何か置いてタイマーでもかければいいでしょ！」

やっぱり自分は入らない気だったらしい。

当然のことを告げるように、わずかに首を傾げて言葉を紡ぐ秘書の姿が、何だかもうどうしようもなく憎たらしい。

駄々をこねる子供か、と隣で小さく呟く平等王の声は無視して抗議すれば、指摘された秘書は秘書で、心底嫌そうに顔を歪め

「えー…それじゃズレるかもしれないじゃないですかー…しかも、タイマーとか…僕走って入って間に合わなかったら物凄くカッコ悪いじゃないですかー」

「いいよ！それでいいよ！カッコ悪い君とか早々見れな……冗談だって…鬼男君…」

「絶対え入らねえ…」

語尾を伸ばし伸ばし反論する秘書に、苛立つまま返してしまった所為で、余計にその意思が固くなってしまった。

失敗に気付くが、彼の眉間に寄ってしまった皺は何時もの調子では絶対に解けてはくれないそうだ。

周りを囲むように立つ部下からも、徐々に責めるような視線が向けられ始めてしまえば、観念するしかないさそうで。

小さく小さく、その意を部下らへ示すつもりで嘆息し、完璧にへそを曲げてしまった秘書へ視線を移して、届くであろう最低限の音量で

「あのね、君がいるのにいない記録なんて、オレは欲しくないよ」

カメラを片手にそっぽを向いていた秘書の動きが止まった。

反応を示した、という事はきちんと私の声が届いている証拠だろうが、一向に応えが言葉として返って来ない。視線もだ。

——嗚呼出来ればこんな言葉は吐きたくないのに。吐いて見せてしまえば、その分要らぬ事まで読んで考えて、その身には不要な苦い思いまでしてしまう子だと言うのに。

こんな手しか使えない身が情けなく感じられ……情けない、という感覚に思わず驚く。

見開きそうになった目を一度、意識してゆっくり開閉させ、料理が並ぶテーブルへ両肘をついて顔の前で指を緩く組ませ、浮かびそうになる表情を隠す。

隠した口許から細く呼気を逃していれば、動きを止めていた秘書がぎこちない動きで此方へ顔を戻していた。

何かに怯えるような：酷く不安そうな表情を晒す彼に視線を注いだまま、驚きから回復した心中から洩れる笑みを向け、おいで、と小さく呼ぶ。

「君が居ないと困るじゃないか」

「っ……」

「鬼男君」

「――……わ……かりましたよちくしょう！」

「ち……ちくしょうって……」

酷く赤い顔のまま空いた椅子を引き摺り、その座面に小さい箱やらトランクやらを積んで、三脚の代わりにするらし……ちよっと待ってそれ私の大事な収納道具なんだけど……

何処か怒ったように行動する彼の様子に、安堵した呼気やら、小さく笑う声が周りから耳に入る事を思えば……この鬼は、私の部下らにまで確りと好かれているのだと気付く。

気付くと同時に一瞬感じた違和感に目を瞠る。

せつせとカメラを固定する作業に勤しむ秘書から、己の胸元辺りへ視線をぎこちなく落とし、既に去った先程の感覚を追おうとしてみる。……が。一度感じた其れはどうやら戻ってきてくれる気など無いらしい。

何となく、の動きで胸元を擦ってしまえば「……大王？」と声をかけられた。

かけられる声に反応して視線を向けてみれば、テーブルを挟んだ向こう側に立つ秘書が幾分心配そうな眉の顰め方で此方を眺めていて。私と視線が合った彼は、ぼんやりした私の様子で更に眉間に刻む皺を深くしながら、自らの胸元を示しつつ

「…大王、どうかしましたか？どこか…」

「ああ…：嗚呼、だいじょうぶ。なんでもないよ」

「…？そうですか？」

だいじょうぶだいじょうぶ、と笑いながら片手をぱたぱたさせてみれば、漸く納得したらしい。小さく嘆息しながらも、再度こちらに背を向け、カメラ…：しっかりトランクケースが土台となった上に鎮座していた…：に手を伸ばして何やら操作し…

「…：よし、いきます！」

そこまで意気込まずともよかろうに、と思ってしまう程勢い良く宣言すると同時、くると踵を返して膝を曲げて屈み、ぐっと床を蹴ってこちら側へ跳躍した。

見事なその動きに目が行き、おお、と小さく歓声を上げる私の横に居た都市王が、さり気なく一步。彼の着地点としての場所を空けて、それに気付いた秘書が身を捻りながらそこへと収まり、くるとカメラ側へ身体の向きを変えてから、スペースを設けてくれた私の部下へ申し訳無さそうに微笑みつつ頭を下げるのを眺めていた、が。視線に気付いたのか、はっとした表情をした秘書が、ぐるんと此方へ向き直りながら片手を私の後頭部へ添え…：いや、がっしり掴みながら怒鳴った。

「ちよっ…：あんたが見るのはあっちだあっち！！」

「い…ツ…：いたいいたいいたい！！」

「うるせえな笑笑！」

「え…：ええええええええ…」

引っ張られる髪が痛みを訴えるが、必死にカメラへ視線を向ける彼

に無理矢理顔の向きを矯正される己の状況が徐々に可笑しくなってきた。

笑えと強制されて笑えるものかとは思ったのだが、存外笑えるものなのだなあと感心する…

…と、同時。

フラッシュの光と、カシヤ、と酷く安っぽい音が鳴った。

省かれた一幕（後書き）

2011. 1. 25（だいぶおくれた…っ）

…えんまだいおう視点で書くのは、二度とごめんだと思いました。

（感想文）

…きっともっと深いのにスキルが足りません…浅くてごめんなさい

…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3959q/>

誕生日小話

2011年1月28日00時01分発行